

日本で初の美術教育関連資料のアーカイブセンターがまもなくオープン。

NPO法人 市民の芸術活動推進委員会は、日本の美術教育に関連した書籍だけのアーカイブセンターづくりに着手した。美術教育に特化した施設はこれまでになく、同法人では、美術のみならず、今日の教育や子どもが抱える諸問題への解決にもつながる資料館になると期待している。

1枚の絵に、子どもたちの心理が現れる。

東京四谷にあるCCAAアートプラザ。元は新宿区の区立小学校だった場所を利用している施設であり、中にはランプ坂ギャラリー、図工室、ギャラリーフレンドなどがある。このうちギャラリーフレンドは「手で触れるギャラリー」として2年前にAJOSCの助成で誕生した視覚障害者のための美術展示室である。

今回の「美術教育関連アーカイブセンター」も同じ施設内の一角にある。中には、書籍や関連情報誌、資料など美術教育に関する書物が多数展示されている。

NPO法人 市民の芸術活動推進委員会理事長の鈴木弘之さんは、長年ご自身が小学校の図工教師を務める中で、他の教科にはなく、美術だけがもっている子どもたちへの心理的な影響力に気づいた。

「今でも図工の授業は、体育の次に子どもたちが好きな授業です」と鈴木さんは語る。

算数や理科などの教科が問題を解く技術を教えるのに対して、美術は技術を教えることが少ない。むしろ、子どもたちの感性を大切に、それぞれを自由に伸びるように見守る授業であるため、だから好かれる。一方で絵は子どもたちの心を映し出す鏡でもあるという。

「絵には、子どもの気持ちが現れます」と鈴木さん。

アーカイブセンターに保管されている子どもの絵を見せてもらった。1枚は街の中を走る車が主人公のような絵である。右側に太陽が描かれているが四分の一は隠れている。鈴木さんによると、太陽は母親の存在を表している。

て、それが小さく、また一部分ということは母親との関係がうまくいってないなどを推測させるという。

もう一枚の絵は、教室のベランダからあわや飛びだそうとしているような少年の絵だ。ちょっと見ると衝撃的だが、妙に印象的な絵でもある。

「おそらくこれは自分自身なのでしょう。どちらの絵も、実際に見た風景を描いたものではなくて、心に映った絵



美術教育に関する書物が多数並べられているアーカイブセンター



来館者が利用しやすいよう著者・雑誌名やカテゴリー毎に分ける作業を進めている

なのです。子どもの描く絵はこうした創造と想像の間から生まれてくるものが多いのです。この絵は指導者が子どもたちに自分の考えを押しつけることなく、自由に描かせたので生まれてきたのです」(鈴木さん)

美術教育を研究することは、教育そのものを考えることにつながる。

実はこれらの絵をアーカイブセンターに寄贈したのは、



「戦後美術教育を考える - 野々目桂三を追って」展のポスター



渋谷こどもの城で開催された「戦後美術教育を考える - 野々目桂三を追って」展

担当者より



貴重な資料の保管と活用ができるようになりました。

NPO法人
市民の芸術活動推進委員会
理事長
鈴木弘之さん

私自身の蔵書も含め、すでに相当数の資料が集まっております。これらが散逸することなく保管されることは、今後の美術教育関係者たちにとって大きな力となるはずで、AJOSC並びにご関係者皆様のご厚情に感謝いたします。

戦後の美術教育を代表する一人である野々目桂三さんだ。野々目さんは福井県の小学校を出発点として、東京の小学校で教鞭をとった。定年退職後は千葉経済大短大部で教員養成に当たった。羽仁進監督のドキュメンタリー映画「絵を描く子どもたち」に登場した青年教師として、創造的な美術教育を実践した人物である。

子どもの表現を尊重する野々目さんは「子どもの心理を探求することこそが、人格・人権を尊重することであり、それこそが教育の本旨にほかならない」と主張する。

今回のアーカイブセンターの設立によって、野々目さんが所蔵していた子どもたちの作品などの資料も数多く収蔵されることになった。またあわせて「戦後美術教育を考える - 野々目桂三を追って」展をCCAAアートプラザと渋谷こどもの城で開催し、連日美術関係者や教育関係者が来場した。

野々目さんの思想は「管理教育が進む現代、子どもの気持ちになって指導する大切さを訴えたい」という鈴木さんら市民の芸術活動推進委員会の考えとも合致する。

「現在はまだ資料の整理が終わっていませんが、完了次第、大学や教育関係者の皆さんにこのアーカイブセンターを公開したいと考えています。日本の美術教育の歴史を研究することは、教育や子どもに関する今日的な課題の解決にも役立つと信じています」と鈴木さんは語ってくれた。